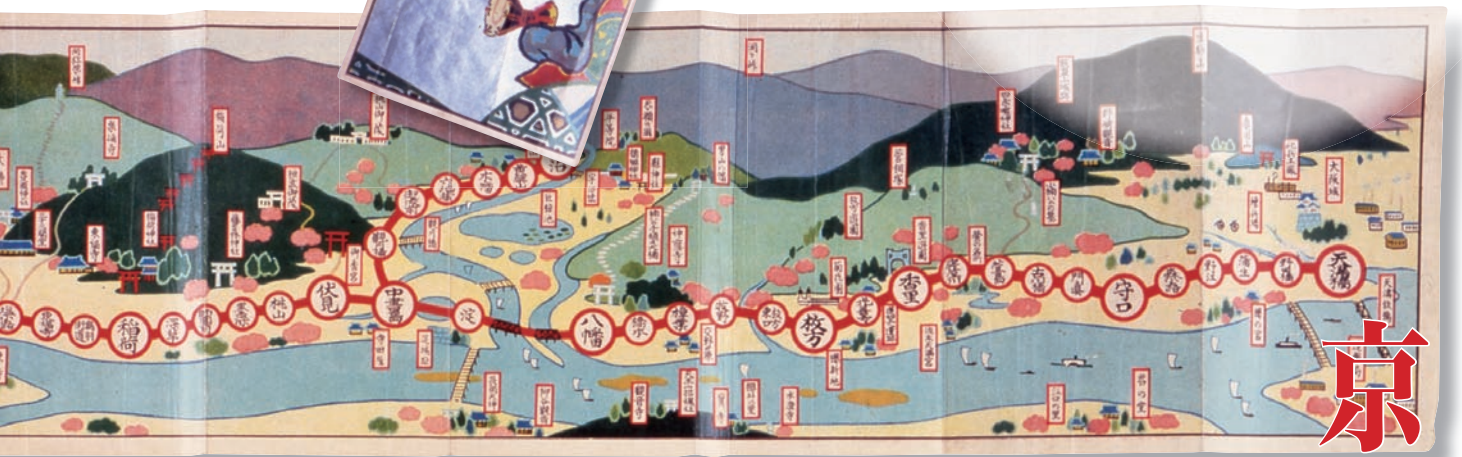
大正・昭和の鳥瞰図絵師
連載―第1回
吉田初三郎の世界



# 京阪電車御案内

文・藤本一美
text by Kazumi FUJIMOTO

大空を飛ぶ鳥の目で俯瞰したような鳥瞰図（鳥観図とも）といえば、現代絵師として著名な石原正、洲嵜晴彦、友利宇景各氏の作品が思い浮かぶ。が、私が惚れ込んでいるのは大正期から昭和初・中期にかけて活躍した絵師・吉田初三郎である。神社仏閣旧跡をワイドに描いた名所図絵や横浜絵（五雲亭貞秀）とも違う、カラフルな色彩と大胆な構図、鳥の目と広角の魚眼レンズの目をミックスした多視点魚眼画法による鳥瞰名所図絵の技法を完成、駆使して、全国にわたって二千種以上の膨大な作品を描いた。

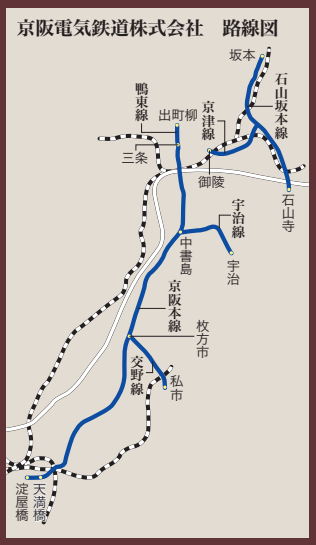
初三郎は明治十七年、京都市中京区の生まれ。十歳で友禅図案の職工として奉公に出るが、明治四十二年、洋画家の鹿子木孟郎（かのこぎたけしろう）に入門。洋画を志すが果たせず、師匠に「まだだれもやっていない商業画を目指したらどうか」と勧められる。職工経験は

**藤本一美**
首都大学東京（都立大学）非常勤講師。日本国際地図学会常任委員。鳥瞰図・展望図資料室兼山岳情報資料室主宰。
近・現代の鳥瞰図絵師の作品収集と研究に精力的に取り組んでいる。近著に『旅と風景と地図の科学Ⅱ』（2006年）がある。

『京阪電車御案内』（大正２（1913）年）
皇太子時代の昭和天皇が「きれいで分かりやすい」とご嘉賞。全国の鉄道・海運会社に鳥瞰地図づくりが広がるきっかけになったといわれる。（提供：京阪電鉄）

## 京阪電気鉄道株式会社
Keihan Electric Railway Co.,Ltd.

創立：明治39年11月19日
設立：昭和24年12月1日
本社：大阪市中央区大手前1丁目7番31号



### 街をつなぐ、心をむすぶ

明治39年創立、明治43年4月15日に大阪・天満橋～京都・五条間で鉄道営業を開始。以後、各支線の開業や天満橋～淀屋橋間の延伸、鴨東線開通など発展を重ねてきた。コーポレートスローガンは「街をつなぐ 心をむすぶ」。鉄道路線網が結ぶ大阪・京都・滋賀の2府1県を中心に、京阪グループとして、鉄道・バス・流通・ホテル・レジャーなど様々な分野で幅広い事業を展開、地域社会に貢献している。

商業デザイン的な感覚を、洋画の修業は芸術的感覚を磨く結果となり、二つの素養の融合によって新しい技法を生み出す。

その出世作が大正二年の『京阪電車御案内』で、初三郎二十九歳の作品であった。翌三年、京阪の貴賓電車で関西を行啓中の皇太子（後の昭和天皇）が目に留められ、数部を持ち帰られたといわれている。爛熟期の画風と比べれば稚拙だが、大阪・天満橋と京都・五条を結んでいた京阪本線と支線の路線図、宇治平等院などの名所・観光地が立体的手法で表現され、当時としては新鮮な発想であった。

これを契機に、大正十年には鉄道省編『鉄道旅行案内』の挿図を描画。こうして鉄道旅行の大衆化や大量の多色刷印刷の普及があいまって、初三郎は売れっ子絵師として活躍。図絵制作の工房（大正名所図絵社・観光社）を構え、弟子たちと一緒に数多くの鉄道沿線図絵や都市鳥瞰図、絵葉書などを続々発刊し、一世を風靡したのだった。昭和三十年、享年七十二歳で逝去後は、二代目初三郎（吉田朝彦）や中村治郎、寺本左近らの旧門弟に継承され、今、鳥瞰図ブームの再来、再発見の見直しが始まっている。